



施設での導入事例：でらいとわーく

「自分の持っている力に気づき、可能性を知る。
自分にとっての“ちょうどいい”を知り、働き続ける喜び、幸せを感じる」
その実現のためのサポートをしたい。

**「就職はゴールではなく、働き続けることが大切。
だからこそ、利用者様に寄りそっての定着支援が非常に大切だと
考えています」**

東京都大田区蒲田。JR、東京急行、京浜急行などの鉄道が乗り入れ、羽田空港も近く、交通至便。東京の都心以外では有数の繁華街であり商業地区です。

今回ご紹介する就労移行支援事業所“でらいとわーく”は、JR蒲田駅から徒歩5～6分ほどのビルの4階にあります。周りにはたくさんのお店や商業施設があり、オフィスビルも立ち並ぶ地域。週1回のスーツデイではスーツを着て、でらいとわーくがあるビルに入っていく利用者みなさんは、ふつうに出勤する社員さんのように見えます。

毎週月曜から金曜の5日間、利用者様方は、午前は元気な声があふれるミーティング（朝礼）からスタートし、2時間の就労支援のトレーニング（国語・数学・英語3教科の公文式学習）に取り組み、午後はパソコンやビジネススキルアップなどをはじめ、仕事をするうえで役立つ豊富なプログラム（月毎・曜日毎により多種を用意）を実践します。

まず、就労移行支援事業所が担うものや役割といったことを、でらいとわーくの西浜さん（副施設長）にうかがってみました。

「わたしたちの役割は文字通り、障害のある利用者様方が仕事に就けるように、多種多様な支援プログラムを用意し、能力やスキルを養っていただき、就労に結びつけることです。もちろん、履歴書の書き方の指導や模擬面接から、ハローワークでの求職活動や職場実習などのサポートもしています。

では、仕事に就けさえすればよいかというと、そうではないと思います。就職はゴールではなく、新しい人生のスタートだからです。その意味では、就いた仕事をやりがいをもって続けられるための定着支援も、同じくらい大切にしています。

その第一歩が、わたしたちがよく口にする“利用者様と仕事とのマッチング”です。簡潔に言えば、その方がもっている能力や志しているもの、たとえば、得意なことは何か？どんな能力が高いのか？やりたい仕事は何か？といったことを、利用者様とともに考え、支援プログラムを通して見つけ、その方にぴったり合った仕事や職場をいっしょに探す…ということになるのでしょうか。もちろん、このマッチングには、企業様側が求めている人材という要素も含まれます」

ちなみに、でらいとわーくを利用される方の多くは、精神障害（統合失調症やうつ病など）や高次脳機能障害（脳外傷や脳血管系の病気などによる認知面を主とした脳の高次な機能の障害や機能不全）とのこと。「就労移行支援事業所」といっても、その事業所により利用される方たちの障害もさまざまです。



でらいとわーくには、服装の違いで、「スーツデイ」と「カジュアルデイ」があり、こちらは「カジュアルデイ」の日の様子



西浜さん（副施設長）



佐藤さん（就労支援員）

**「職場の人たちから“この人のために何かしてあげなくちゃ”と
思っただけのような、可愛らしさのある人になって、ここを巣立っ
て行ってほしいです」**

でらいとわーくが公文式学習を導入したのは2015年3月から。その理由について、西浜さんはこう話してくださいます。

「さきほど、就労に必要な能力やスキルを養う…と話しましたが、障害のある方対象に以前から作業所や授産施設でしていたような単純作業的な訓練では、仕事に必要な能力やスキルを養うという前に、その方がどんな能力を秘めているのか、何が得意なのかなどは、なかなかわからないのかなと思います。

公文式のように、いまもっている能力にちょうど合った内容の教材をする、それも100点に仕上げながら学ぶことで、“自分はこれだけできるんだ”、“こんなに可能性があるんだ”と自信や自己肯定感がもてます。そのプロセスで学力はもちろん、新しいものを学ぶ意欲も生まれてきますし、そういう状態になるからこそ、その方の能力や良い面が見えてくるのだと思います。そこに魅かれ、当時のうちの代表が公文の導入を決めたのですが、わたしもまったく同じ想いです」

ところで、でらいとわーくのスタッフのみなさんには利用者様方に「可愛らしさのある人になって、ここを巣立って行ってほしい」という共通の想いがあるそうですが、具体的にどんなことなのでしょう。就労支援員の佐藤さんにうかがってみました。

「働きやすい職場というのはすでにあるのではなく、そこに集まる人たちが創っていくものなのだと思います。それには障害のあるなしは関係ないですね。ですから、わたしたちスタッフは、利用者様方が就職してから、その職場の人たちから“この人、いま困っているみたいだから何とかしてあげよう”と願っていただけるような、可愛らしさのある人になって巣立って行ってほしいと心から思っています。そういう人が一人でもいると、職場って空気が変わりますから。明るくなりますよね」

このお話を受け、職業指導員の藤崎さんがこう続けます。

「可愛らしさのある人、具体的にどんな人なのかをわたしなりに言えば、“一所懸命に仕事に取り組む”、“向上心や意欲がある”、“アドバイスや注意を素直に聞ける”といったことがそなわっている人だと思います。そして、そのどれもが公文の学習で培ってけると、最近強く実感できるようになりました。日々の教材に真剣に取り組む、先の教材へ進むためにがんばる、ミスの訂正や教材進度の調整などでわたしたちスタッフの話をきちんと聴く。こういう毎日の積み重ねがあるからこそですね」

仕事に就いたあと、職場で働く利用者さんをイメージし「可愛らしさのある人」になってほしいというスタッフ全員の想い。この想いが、でらいとわーくの温かな雰囲気を醸しだしている、利用者の方々の笑顔につながっているのだとわかりました。聞けば、スタッフのほとんどは、一般企業、大手企業での仕事の経験がおりとのことで、そこでの人間関係や働きやすさなどを考えたうえでの、「可愛らしさ」を願う気持ちが深く伝わってきました。

「公文に出会ったことで、利用者様方はとても良い状態になっていますが、わたしたちスタッフも少しずつですが変化し、成長しています」

2015年3月に、就労支援トレーニングの一環として公文式の国語、数学、英語の3教科を導入したでらいとわーく。スタッフのみなさんは、公文の学習をどうとらえているのでしょうか。就労支援員の佐藤さんにうかがいました。

「公文の学習はとても興味深いです。健康面やメンタル面も含め、その日の状態が良くも悪くも学習にあらわれてくるのです。状態の良い日は教材を学習する時間も速く、ミスも少ないのですが、良くない日は時間がかかり、ミスも目立ち、字までも乱雑になってきます。そういったことを日々見ているうちに、利用者様一人ひとりをよく見て、そ



英語 E-pencilを使っでの学習風景
これは公文式教室ではおなじみのE-pencilを使った英語学習ですが、でらいとわーくでの英語学習で、意外な効用があることがわかりました。それは“電話を受けながら、メモをとる態勢と習慣づくり”です。たしかに、電話を受けている姿に重なりますね。

の日の状態に合った対応や言葉かけができるようになりました。このことは、自分自身、大きな変化だと感じています。

しかし、公文の学習でいちばんいいなと思うのは、“できた！”っていう成功体験を重ねることですね。自己肯定感ももてるでしょうし、メンタル的にも強くなると思います。実際、失語症と診断された利用者様が、公文の学習を続けるうち、国語や英語の学習で音読をくり返すうちに、言葉として出てくるようになったことにすごく驚いています。音読練習の効果もあるとは思いますが、成功体験が大きく影響しているのかなと思っています」

職業指導員藤崎さんは、こんなふうにコメントしてくださいました。

「公文の学習は、すべて仕事に置き換えられると思います。たとえば、つぎの教材に進んでむずかしいところになったとき、決められた学習時間内に目標枚数ができないときもあります。たとえば、目標の10枚に届かず8枚を終えたところで終了時刻。ご本人も納得がいけない様子。そんなときは、“これが仕事であれば残業になりますね”、“でも、残業できない日もあるので、残った仕事を明日にまわすことも考えたいですね”といった言葉かけをさせていただきます。そうすると、利用者様も“なるほど！”という表情になります。それで、“今日できなかった分は明日やろう”、“むずかしいところになったから、ちょっとだけ枚数を少なくしよう”など、ご自分で考えて、ちょうどいい枚数に調整できるようになっていきます。でも、そのためには、利用者様お一人おひとりをよく見ていないといけないので、わたしも、自然と見る眼が磨かれているような気がします」

おふたりの話を横で聴いていた西浜さん（副施設長）は、にこやかな表情でこんなお話を…。

「つい最近のことですが、うちを巣立って仕事に就いた利用者様方から“公文をやってよかったです”というお話をたて続けに聞いたのです。というのも、“よろしくお願いします”、“ありがとうございます”、“失礼します”といったあいさつの言葉が、それに合わせたおじぎも含め、職場で自然にできるそうです（※）。そして、仕事を集中して続けられるのをほめられることも多いと聞きました。“でらいとわーくで公文の学習をしているときにはわからなかったけど、会社に入って初めて、公文の学習で身につくものの大切さがわかりました”と、異口同音に話されるので、わたしもびっくりでした」。

※あいさつの言葉、それに合わせたおじぎ

公文式学習を導入している就労移行支援事業所では、学習の始めと終わりのあいさつ、学習した教材の採点時の受け渡しのときなどに、「失礼します」「よろしくお願いします」「ありがとうございます」といったあいさつを、おじぎも合わせ励行しています。これは公文式学習を「仕事」ととらえ、学習の場を「模擬的な職場空間」にしています。これは礼儀作法を身につけるための着想であり実践です。もちろん、公文式学習の最大の目的は、学力をつけ、集中力や持続力などを養いつつ、能力全般を高めていくことですが、こうしたあいさつやおじぎは、仕事に就いてからのほうが役立つようです。

「悪いのは子どもではない」

インタビューの最後に、副施設長の西浜さんはこう話してくださいました。

「公文には、創始者の公文公（くもんとおる）さんが遺された“悪いのは子どもではない”という言葉がありますね。聞いたときハッとしました。これをわたしなりに言い換えると、“障害のある方たちが就労できないのは、周りに問題や課題がある”となるでしょうか。

どんな人でも得意なことやすぐれた能力はあるはずですが、それに周りが気づけないだけなのかもしれません。けれど、ちょうどのことをしながら、少しずつレベルアップしていく公文の学習なら、まず、われわれスタッフが気づけます。そして、“あなたにはこんないいところがあるじゃないですか！”という言葉かけで、ご自身が気づき、自信となり意欲となる。いま、こういうことが、利用者様方とスタッフのあいだで日々おきているのだと思います。

自分の良いところ、現在の能力や可能性に気づくことで、自分に合った仕事も見つけやすくなるでしょうし、“自分がやりたい仕事に就くにはこれから何をすればよいか”と

いった道筋も見えてくると思うのです。そういったことを公文の学習を通して身につけてほしいですね。公文では“ちょうど”を大切にしていますが、それに倣って言えば、“いまの自分のもてる力に気づき、自分の可能性を知って、それに合ったちょうどいい仕事に就く”。それにより、働く喜びや幸せを感じることができれば、利用者様は生きがいのある毎日を送れるのではないかと思います。わたしたちは、その実現に最大限のサポートをしていきたいと考えています」。

さて最後に、利用者みなさんの声をご紹介します。まず、一昨年暮れに脳卒中で倒れ、入院。その後、失語症と診断された男性（60代）の利用者さんです。

「わたしの場合、倒れてから10カ月ほど入院しました。幸いなことに手足に麻痺は残らなかったのですが、ほんとに話せない書けないという状態になり、失語症という診断でした。それでも、なんとかしたいと、ここに来たのが昨年12月。ですから、まだお世話になりはじめて9カ月くらいです。けれど、公文の学習が楽しくて、はじめのうちは教材の音読もほとんどできなかったのが、少しずつ言葉がでるようになって、それをスタッフのみなさんに“すごい！”ってほめられて…をくり返していたら、以前のように頭に描く言葉が出るようになってきました。自分でも、まだ信じられませんが…」

つづけて、4人の利用者の方のコメントをワンポイントで。

「もともと計算が得意なのですが、満点がとれたとき、つぎの教材に進めたときの達成感は格別ですね」（40代・女性）

「病気（うつ病）になるまではふつうに話せたんですが、病気になってからは話すのが辛くなりました。でも、ここに来て、音読しているうちに話してもいいんだ、話そうという気持ちになれました。救われました」（30代・女性）

「公文の学習は楽しいですし、集中力を養うということではとてもいいですね。学習が仕事の延長線上にあるようにも感じられますね」（40代・男性）

「担当医の勧めがあって、昨年の6月からお世話になっています。ここに来なかったら、これほどたくさんの量の学習はしていなかったでしょうね。頭の回転というか、脳の活動が良くなった印象があります」（40代・女性・就職活動中）

みなさんがやりたい仕事に就いて、やりがいのある日々を送れるようになる日が、一日も早くくるよう応援しています！

（2016年10月現在）